NY エッセイ 55

中瀬有紀

仕事ができる?



Sorry at LPAC

「仕事ができる」という評価基準は、国や業界また会社に属しているため、働く環境下における作法を覚え円滑に動ける人間が「仕事ができる」という評価を得ます。ここ最近、私は非常に個性豊かな3つの作品制作に携わりました。それぞれ「仕事ができる」という評価に対して全く違う基準を持ち合わせています。

Manhattan Theatre Club主催でDenis Arndt氏とMary-Louise Parker氏による2人芝居『*Heisenberg*』に、照明家Donald Holder氏のアシスタントとして従事しました。イギリスの劇作家Simon Stephens氏によるこの新作は、30歳以上年離れた男女の恋愛を描いた物語です。「人生の限られた時間に、自分が何であるかよりも何をするかを考えることが大事だ」と強調する対話が胸に刺さりました。Holder氏の仕事が問題なく進むため、常に最新の状況を反映した資料を管理し、彼の指示をオペレーターに伝えて実現するのが私の仕事です。労働時間、報酬、進行スケジュールや仕事の役割分担を明確にするユニオンの就業体制下では、照明家補佐役の見識に加えてユニオンの働き方の理解が基本となります。

LaGuardia Performing Arts Center(LPAC)に拠点をおくマルチメディア・ダンス・カンパニーShook Onesの新作『*Sorry*』には、美術照明デザイナーとして参加しました。プロセニアム劇場の舞台中に客席と演じる場を共存させる試みで、観客と制作者が一体となって供に作品を仕上げるような居心地の良い空間創り、そして舞台前と奥のスクリーンに投影される映像がすべての客席から確実に見える配置に気を遣いました。大きな劇場の装置と技術をたった6人で請け負うLPAC技術チームの強い繋がり、テクニカル・ディレクターのリーダーシップと規則に縛られず柔軟に要望に応える懐の大きさには脱帽です。この仕事においては、彼らの仕事の仕方を尊重し、待つことのできる能力、時間内に約束した内容が果たされない状況に対応する臨機応変さが必要不可欠でした。

Gibney Danceの式典『*Spring Benefit*』がAgnes Varis Performing Arts Centerで開催され、照明デザイナー兼テクニカル・ディレクターとして参加しました。創設者Gina Gibney氏が立ち上げたその施設は7つのスタジオと1つの劇場を持ち合わせ、ダンスに関わる人たちが気軽に集うことのできる素晴らしい空間を提供しています。式典における最大の挑戦は、当日に知らされた舞台監督不在です。制作の要である舞台監督を用意しなかった主催者の意図はわかりませんが、私がやると決めたのは技術が関わる動きだけは滞りなくまとめることでした。複数の空間と劇場でのダンス公演の照明をデザインしつつ、技術各部署に指示し、疑似的舞台監督を務め、私が目指す仕事の質を維持するには体がもう1つ必要で残念でした。技術者として雇われたけれども、主催者が私に求めていたのは舞台監督役だったように感じます。

舞台、テレビ、イベント制作のすべてに共通するのが、共同制作であるという点です。したがって個々の繋がりの強さとトップに立つ人間のリーダーシップが成功の鍵となることには違いありません。しかし、国や業界または会社によって仕事の仕方と個人に求められる役目が異なります。「仕事ができる」という評価をもらえるに越したことはありませんが、その基準が曖昧であることを頭の隅に置いておいてもよいでしょう。